

新年の祈り

清水 光子

あけましておめでとう

新年おめでとうございます

の挨拶がかわされる一九八九年のお正月が巡って来た。

「お正月だ、新年だなんて、人間が勝手にきめたことで、きのうと今日とおなじ太陽じゃないか、どうってことないじゃないか」という人達もいるけれど。



「育ての心」の「正月」に、「日本の子どもが揃って一斉に、一つ宛大きくなったと思うと心の底からほほ笑ましくなる。」とあり、「自分の新しい齢を誇っている。あのかわいい指で、口で」中略「実際、正月が公平にわけてくれた齢の中でも、子どもらの分は黄金の特製で、どれも一つとして輝かしい光に輝き光っていないものはない。」と言っておられる。その頃の年齢の数え方と現在のそのちがいは言うまでもないが、この文章には倉橋惣三先生が新年にあたって子ども達への熱い希い、祈りがこめられていると私はしみじみと思う。

いつもは「おはよう！」と飛び込んでくるY君が、始業の日、ちょっとはにかんでおじぎまでするかわいらしき。つややかな頬と澄んだ瞳、この老婆は涙ぐんでしまう。

Mちゃんは少しちがっていた。きちんと手を揃えて「あけましておめでとうございませ。」と頭をさげているのだが、どうしたことかこちらの顔をみない。「おめでとうございませ。」と応じて、「Mちゃん、また一ぱい遊ぼうね。」と手を取って、顔を覗いて言う。「うん、」とうなずいて、にこっと笑ってくれた。老婆は何かほっとして、うれしくてまたしても胸を熱くする。どの子どもどの子ども元気で明るいこの年の日々がありますように、黄金の特製の年であるようにと切なる願いがこみあげる。

倉橋先生は『幼稚園雑草』の中で「お正月が来た。子どもの喜ぶお正月が来た。子どもの喜ぶことなら、年が年中でもいい。いわんや一年に一度のお正月だ。いくらでも子どもを喜ばせてやりたい。」と言っておられる。これは半世紀前のことである。「世界中が彼等（こ

ども)のためにここにこしていて呉れる。」「遊べ、遊べ、なせもっと遊ばないのかといつて呉れる。実にお正月は世界中の児童観を変えると言ってもよい。何という幸福なことだろう。」倉橋先生のこれらの言葉にこめられた希い、祈りを今、あらためて声をあげて叫びたい。日本の将来の為にとか、人類の進歩の為にとか大げさなことでなく、ごく身近な、私のクラスのAちゃんB君、お隣りの家のC君とその弟、妹ちゃん達の子もどの子も一杯に自分を出して、気儘きまごでない自由な遊びを楽しめるような時間と空間を取り戻すように、大人が真剣に工夫をしようではないかと思う。

「うちのS子がかせをひき易いので、なるべく外へ出さないでください。」と母親が言つて来た。S子ちゃんは顔色がよくなく、大声を出すこともない。といって遊ばないというのではなく、母親が「幼稚園で教えていただかないけれど、うちのS子はかなは全部よみ、かけますし、漢字もずい分よめますの。」と自慢(?)するだけあって、絵ばなしを皆で作るなどという時は大はりきりで、しっかりした字をかいて子ども達の賞讃の的になったりする。が、受け持ち保育者は今いち物足りない。そのS子が珍らしく暖かい日射しの一月のある日、なわとびのグループに加わった。おなみおなみをしばらくみていて、一大決心したように順番が来てとんだ。ひっかかりもせず五回とんだ。「とべた!」という成就感にその満足した顔といったら! 大分なわとびに加わっていて「先生、暑い!」と来たのでさわってみると肌着がしっとりぬれている。「かえようね。」と乾いた備え付けと取りかえようとした時、驚いたのは大へん厚着をしていることだった。「風邪をひき易いか

ら」との心配ではわかるが、それがかえってこの子の活力を阻んでいたのではないかと
思った。降園の時、母親にその日のことを活し、母親の自信と誇りを傷つけないように気
をつけながら薄着をすすめたことだった。

北半球、殊に日本列島では、一年中で一番気温の低いのが一月から二月の中旬のよう
である。空気がかわいて、関東地方など北風が強く吹いて外はひどく寒い日が多い。けれど
地球は確実に春に向かって動いていて、冬至十日をすぎると昔の人の言った「晷の目ほど
ずつ」日が伸びる。そのような中で、昔からの外遊びがあるのはうれしい。日だまりで押
しくらまんじゅうなどは知る人も少ないかもわからないが、なわとび、石けり、ドンジャ
ンケン、陣取り、少し大きい子どもは缶けり、それらのヴァリエーション。場所と時間さ
えあれば現代の遊べない子といえども子どもは遊びの、遊びづくりの天才だと思ふし、私
はそう信じている。その環境ときっかけをつくってあげる大人、新年に、心を新たに何か
を始めようという「子どもをめぐる大人」があったら、何とかしてまずそれを始めて欲し
い。

三学期は卒業（園）を控えてさまざまな行事が次々にひしめいていて、園・親たちは入
園、入学、卒園とまた心忙しい。子どもを取り巻く大人の心がいつにもましてせわしくな
り勝ちであり、これだけはせめてやらせたいとの熱意で子どもを追いつめてしまうこと
がありはしないか、それだけでなくも室内に籠ることが多い時期である。

もう何年か前によんだ森本哲郎著「ゆたかきへの旅」の中で「物質的に貧しい国ほど時間は豊かである」とあって感銘を受けた。物質的に豊かすぎる程豊かな（？）現在の日本で、子ども達は時間を決して豊かにもっているとはいえないと感じられる。

南向きのテラスの日溜りに座ってT子とY子と私、あやとりをしていた。Y子がお姉ちゃんから教えて貰ったという「月にむら雲」という独りあやとりをT子と私に教えてくれた。そこへNちゃんが来て「これほどいて」と毛糸のあやとりひもを持って来た。「いいわ、私、ほどくの名人」なんて言いながら眼鏡をかけて解き始める。「どうしてこんなに固くこぶを作ってしまったのかしらねえ」とつぶやきながら少しづつほどいていく。T子、Y子、N子ちゃんもじっと私の手元に見入っている。それをはじめは意識していたのがだんだん私自身、夢中になって解くのがたのしくて……。Nちゃんが「ほどいておいてね」と園庭に走っていってしまうのを「OK!」と返事しながら、私は今、何という怠慢な無責任な保育者だろうと思ったことだった。代々木公園に、みんなで作った凧を飛ばしに（揚げるほどではないので）行った時も、捨てられた凧糸があちこちにあるのを集めて、もつれをほどき、新聞紙を折ったのへ巻きつけるしごとを、まるつきり貧乏性でやっていた。「おばあちゃん、何してるの？」と三歳のMちゃんが手元をみてふしぎそうに尋ねる。「凧の糸、ほどいてるの」そこへU君が来て「切って、つなげばいいじゃん？」「わたし、切るのきらいなの、ほどくの好きなの。」と答えて、つい夢中になって、新聞紙に巻かれた糸も可成りになった。嬉しくて、私が持って来た凧の短い糸に、今ほどいた糸

をつなぎ、風に向かって走る。その手ごたえの快さ。

ほほを赤くして外から入って来て、室内の暖かさにはっと寛いとする室内遊び、お正月に限ったことはないけれど、子ども達でつくったカルタ取り、双六、福笑いなど、昔からあるものが又、このごろの新しい感覚で登場しているのも楽しい。

お正月休みで「どこへ行ったとき」の話も出、「誰ちゃんと会ったね」など、生活発表というような堅くるしきのない話しあいの中で、人の話をきくという大切なことを学ぶ機会があるうというものである。そんなときGちゃんが「ね、初夢って知ってる？」ときく。「ええ、お正月の二日の夜みる夢のことですよ?」「うん、富士山の夢見るといいんだってさ、それ、僕、見たんだ!」「まあ、Gくん、いっぱいいいことあるわね、きつと。」まわりの子ども達はそれから、夢のこと、あれこれ賑やかに話しがはずんでいった。私、老婆は

ふじの山 夢に見るこそ果報なれ 路銀もいらすくたびれもせず……油煙斎永田貞柳
を思い出していたのだ。

お正月というと初という字がつくのがいろいろある。初詣であり、書初め、弾初めはいうまでもなく、その意はふしめを何かの生活の向上のきっかけにしたいのではないかしらと思う。でも漱石が「三四郎」の中で故郷の母から来た手紙を「古ぼけた昔から届いた様

な気がする」と言っているようなことでもあるうが。

物皆は 改まる良しただしくも 人は古りゆく 宜よろしかるべし 万葉集よみ人知らず

でもあるうか。

ともあれ

生ける者 遂にも死ぬるものになれば この世なる間は楽しくをあらな

万葉集・大伴旅人

幼き子らには切に楽しい日々をと祈りたい。

「子どもたちよ、さあいっしょに遊ぼう。よろしくお正月はおまえたちと遊ぶためのお休み日なのだ」(幼稚園雑草より)

遊んで、遊んで、子ども達みんなのよいお正月、よい年であるように祈る私のお正月である。

(音羽幼稚園)